

「車いく

古堤街道
ふるつみかいどう

さまがわり」



古堤街道は、大阪の京橋を起点として旧大和川や寝屋川の北堤防上を東に進み、河内平野を横断して奈良へ向かう主要な道路の一つです。享保21年（1736）刊行の「五畿内志」には「中垣内越」、「古堤路」と記され、江戸時代には放出までを「古堤路」、中垣内からは「中垣内越」、「生駒越」などと呼ばれましたが、明治になり「古堤街道」と呼ばれるようになりました。

当初は旧大和川の堤防上や新開池の北側堤防上を進み、深野池は舟で渡っていました。承応4年（1655）に現寝屋川筋の徳庵井路が開削されると、「徳庵堤」と呼ばれる堤防上を進み、宝永元

年（1704）の大和川付け替え後は、深野池開発による深野南新田内を横断するようになり、現在に見られる古堤街道が形成されました。そして山間部の龍間地区に入る手前で、四條畷市下田原で奈良方面に向かう清瀧街道に合流する「北ルート」と、現在は残っていませんが生駒方面に向かう「南ルート」に分岐していました。

市域での特徴としては、西部では周辺より約2メートル程度高く、堤防

上の道であったことをよく示していることや、寝屋川と恩智川が合流する住道では、「角堂浜」と呼ばれる船着場と交差していたことから、水・陸両交通が交差する地として、住道の発展に大いに寄与したことで、また東部では落ち着いた昔ながらの街道の雰囲気が残されています。

現在では阪奈道路が主要道路となったことから、その役割を終え様変わりしましたが、当初は寝屋川の舟運と共に大東市の発展には欠かせない重要な道路であったと言えます。（生涯学習課）



段蔵が残る古堤街道（諸福3丁目）